

令和4年度 健康福祉学科

自己点検・評価報告書

令和5年3月

富山短期大学 健康福祉学科

令和4年度 健康福祉学科 自己点検報告書

1 建学の精神（他部局で記載のため省略）

2 地域・社会への貢献

（1）現状

①「地域での介護の仕事魅力アップ推進研究モデル事業」（富山県委託）

- ・呉羽地域の自治振興会や社会福祉協議会、長寿会、介護保険事業所、地域包括支援センター等と連携し、介護の仕事の理解を促進するための交流会や勉強会を開催するほか、新たに「つなぐ・つながるプロジェクト」を実施し、地域住民と介護保険事業者等とのつながりを促進し、事例集にまとめた。
- ・介護人材確保の一助として、介護助手として介護現場での就労を支援する入門的研修や業務体験支援を実施した。また、新たに、地域での介護助手の理解促進を図るため「介護助手交流会」を開催するとともに、冊子を作製した。

②シルバー人材センターセミナー

新たに、富山県シルバー人材センター連合会の依頼を受け、「シルバー派遣キャリアアップ教育訓練」の講師を務め、学科教員2名が計12会場を担当した。

③「中学・高校生介護人材発掘事業」（富山県社会福祉協議会から受託）

中学校や高校への出前講座を、中学校3校に計5回、高校6校に計7回実施した。

④リカレント教育（県補助事業）

「富山県高等教育機関リカレント教育推進事業」を活用し、「多様な福祉・介護人材の確保を目指して」をテーマに、3回シリーズでオンラインにて実施した。

⑤「高校生のための健康と福祉のオンラインワンポイントセミナー&進学相談会」

健康と福祉の入門講座および進学相談会を、オンライン（5日間）で実施した。

⑥富山県介護福祉士養成校協会の会長校および事務局校

介護福祉士養成校教育に関する連絡協議会、県委託事業「高校生のための福祉のガイド本」（第7版）を本学が中心となり作成し、県内の高校1年生を対象に配布した。

⑦「介護の日」イベントへの参加

- ・1・2年生が合同でボランティアグループ「Tomitan スマイル8+」を結成。チームが考案したリズム体操を披露。
- ・1年生全員で作成したマスクピアスを配布し、認知症や要介護状態の方々に対する理解を深める啓発活動を行った。
- ・イベントのサブタイトルが2年生の応募作品に決まり、表彰を授与した。

⑧富山県老人福祉施設協議会の研究レポート選考委員

専任教員1人が選考委員会座長を務め、介護の質の向上に寄与した。

⑨その他

個々の教員の専門性を活かし、富山県社会福祉審議会委員や富山県福祉人材確保対策会議委員、上市町地域福祉活動計画策定委員会をはじめとした審議会や各種会議委員ならびに介護支援専門員や介護福祉士実習指導者、民生委員・児童委員、保護司、社会福祉協議会等の研修講師や高校への出張授業など、多様な依頼を日常業務に支障がない範囲で引き受けている。

(2) 課題

- ①各種講座やセミナーの開催にあたり、効果的な広報手段の工夫が求められる。
- ②外部からの依頼に応えていくため、効率的な学科運営に向けた改善が必要である。
- ③高校生、中学生向けの出前講座、地域住民への入門講座により、介護に対する啓発を推進していく。

(3) 特記事項

- ①富山県介護福祉士養成校協会の平成 15 年度の創立以来、会長校ならびに事務局校を担っている。
- ②富山県障害者スポーツ大会（陸上競技会）の補助スタッフとして、学科開設以来、学生が毎年参加している。例年は 1 年生が主体であるが、昨年度は感染症拡大により中止となったため、今年度は 1・2 年生全員で参加した。
- ③日本介護福祉士養成施設協会による全国教員研修の大会長を学長が務めるとともに、学科長が実行委員を担った。
- ④教員の一人は、厚生労働省の老人保健健康増進等事業における調査研究事業の委員を務めた。
- ⑤富山県福祉人材確保対策会議の会長を学長が務めるとともに、学科長がワーキング座長を担っている。
- ⑥富山県社会福祉審議会の委員に、学長と学科長が加わっている。

(4) 改善計画

- ①地元の団体・組織と連携しながら、地域貢献の推進に尽力していく。
- ②講師や委員等の依頼は、公務を調整しながら積極的に受けていく。
- ③高校生を対象とした講座を積極的に広報していく。

3 教育目的・目標の確立

(1) 現状

- ①学生及び教員に配布する『学生のしおり』に明記するとともに、本学 Web ページの「学校概要～教育研究活動の概要」でも学内外に表明している。自己点検・評価委員会、教務委員会、学科会議、卒業生との教育課程懇談会と非常勤講師を交えた教育課程懇談会を実施し、点検・見直しを行った。

②富山県社会福祉審議会をはじめ富山県福祉人材確保対策会議や富山県介護福祉士養成校協会等の討議結果など、社会が求める介護・福祉人材像を反映するよう取り組んでいる。また、福祉・介護職場の情報化・デジタル化、「進化・深化する介護」に対応するため、令和5年度にむけて検討を行った。

(2) 課題

- ①新型コロナウイルスが感染症類型の5類に変更になるが、感染状況に応じ、教育目的・目標を達成するために適時適切な対応が必要である。
- ②学科の社会的ミッション、教育目的・目標を達成していくために、中学生や高校生とその保護者及び教員、さらには社会全体に「介護の仕事」の魅力・深さ・豊かさを正しく伝えていく必要がある。

(3) 特記事項

新型コロナウイルス感染症の影響も踏まえ、各実習の目的・目標を達成するために実習施設とも話し合い、実習内容等の見直しを行った。

(4) 改善計画

- ①教育目的や目標を、高校生らに広く伝えていく手立てを講じる。
- ②情報化・デジタル化に対応したものに改善していく。

4 学習成果

(1) 現状

- ①建学の精神に基づき定められた本学の学習成果に基づき、健康福祉学科の学習成果を定めている。学習成果を「学生生活のしおり」やWebシラバスに「学習成果別判断基準(ループリック)」として記載し、学内外に表明している。
- ②受講カードやWebシラバスを利用して毎回の授業を振りかえり、期末の授業アンケートを通して学生の学習成果をレーダーチャートで可視化し点検するとともに、各教員が学期ごとに「授業改善レポート」を作成している。
- ③生活支援技術については生活支援技術到達表を作成し、2年次の2月に到達度を評価している。また、医療的ケアについては学生がチェックリストに基づき5回以上授業時間で行うとともに、実技試験でミスがない状態を成果としている。
- ④学習成果としての資格取得は、国家資格である介護福祉士、医療的ケア基本研修修了、普通救命Ⅱ講習修了、介護職員初任者研修修了、社会福祉主事任用資格、メディカルクラーク、ケアクラーク、福祉住環境コーディネーター、日商PC検定がある。新たに、日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会認定の「介護サービス担当者のためのストーマケア講習会」修了、アクティビティワーカー資格受験も可能なカリキュラムとした。

(2) 課題

- ①感染症等で登校できない場合に学習成果をあげる創意と工夫が必要である。
- ②介護福祉士養成課程では、科目ごとのルーブリックのつながりを学生や教員がよく理解できるように整理する。

(3) 特記事項

- ①実習事前訪問を ZOOM で行ったことにより、実習指導者と効率的な実習目的・目標の共有が行えた。
- ②実習の学修成果を高めるため、実習指導者とのオンライン会議を 4 回にわたり開催。

(4) 改善計画

- ①感染症や大雪の状況など危機管理には、常に弾力的な運用を行う。
- ②他の養成校の「学習成果別評価基準（ルーブリック）」を参考にしながら、学科での検討を行っていく。
- ③科目と科目のつながりや、ルーブリックについての理解を深めるオリエンテーションの方法を検討する。

5 三つの方針

(1) 現状

- ①本学が定めた三つの方針及び第 2 条の 2 (4) に定めた学科の教育研究上の目的に基づいてディプロマ・ポリシーを、教育課程編成方針とともにカリキュラム・ポリシーを「学生生活のしおり」に記載している。また、アドミッションポリシーを学科の教育課程と一体的に策定している。
- ②三つの方針を踏まえた教育活動を行っており、前期末及び後期末の「授業評価アンケート」の記入を学生に求めるほか、卒業直前の「学生との教育課程懇談会」、非常勤講師や兼任教員との「教育課程懇談会」を開催して、今後の教育指導に関わる意見をいただいた。

(2) 課題

- ①介護福祉士養成課程が 1900 時間を超えており、カリキュラムの編成に工夫が必要である。
- ②三つの方針において、学科の特性や魅力を受験生並びに保護者、高校の教員の心に届くような適切な言葉・表現の工夫が求められる。

(3) 特記事項

情報リテラシーに対応するよう情報分野の科目内容を検討し、学則及び介護福祉士養成課程履修細則の見直しを行った。

(4) 改善計画

- ①受験生並びに保護者、高校の教員に三つの方針の情報発信に努める。
- ②各科目のシラバスを点検し、内容を整理する。
- ③令和5年度から新しく取得できるようになった資格と教育内容や科目を検討し、効率的な教育課程を編成する。

6 内部質保証

(1) 現状

- ①定められた時期に毎年、学科内で教員全員が分担しながら自己点検に取り組んでいる。評価項目は短大基準協会の第三者評価の基準をもとに実施し、標準的な自己点検・評価となるよう努めている。
- ②日常的な自己点検・評価活動の一環として、毎週行う科会では日頃の教育活動や学生指導等が出てきた問題や予想される課題についての意見交換、すでに生じた事案への対応などを学科の総意と共通理解で行う体制を整えている。また、支援結果についても科会で共有している。
- ③高校訪問で出された意見や富山県介護福祉士養成校協会による「介護福祉士養成教育に関する連絡協議会」で寄せられた意見なども、自己点検や評価活動に反映している。
- ④大学で設置する「外部評価委員会」での指摘事項も自己評価の材料としている。

(2) 課題

教員における自己点検の視点の平準化をはかる。

(3) 特記事項

シラバス作成後の学科内での点検作業も導入し、教員相互に改善に取り組む体制と意識化を図った。

(4) 改善計画

- ①課題等を確実に改善につなげ、その結果の検証を行うルール作りに取り組む。

7 教育の質保証

(1) 現状

①概要

- ・教育向上・充実のPDCAサイクルは、前期・後期の始めの教務委員によるシラバス点検や学科教員全員が学内のFD研修会に参加するとともに、毎回の授業、成績の分布や授業アンケートの結果を分析して「授業改善レポート」を作成し、改善につなげている。

- ・新入生の入学時の学力を把握するため、入学時テスト（プレースメントテスト）を実施し、個別支援に生かしている。
- ・介護福祉士養成課程の生活支援技術については生活支援技術到達表を作成し、2年次の2月に到達度を学内評価している。医療的ケアについても、喀痰吸引（口腔内・鼻腔内・気管カニューレ内）、経鼻経管栄養、胃ろう・腸ろうの5種目について、チェックリストに基づき5回以上実施した後、技術試験でミスなく実施できた時に合格としている。
- ・実習では、学生とともに作成した感染症対策マニュアルを使用した。また、新たにシャドーイングを取り入れた実習を行い、基礎実習Ⅰ-1終了後、介護福祉士資格取得を目指す学生の割合が約18ポイント増加した。
- ・情報化・デジタル化、進化・深化する介護に対応するよう努めた。
1・2年生合同での学内実習「福祉機器の体験学習」を介護施設から講師を招き、機器も持ち込んでもらうなどして実施した。

②授業アンケート結果

- ・学修成果に対する自己評価の平均値は昨年度に比べ、前期は1年生、2年生ともに増加したが、後期は、1年生が減少し、2年生は微増した。
- ・総合評価の授業満足度（4点満点）は、前期は1年生3.7から3.6に0.1ポイント減少、2年生3.4から3.7に0.3ポイント増加した。後期は1年生3.7から3.3に0.3ポイント減少、2年生3.6から3.6と変わらなかった。

③シラバスのループリックからみた学修成果の評価

- ・シラバスのループリックからみた学修成果では、自己評価や満足度において評価が高く、学修成果も高い科目もあればそうでない科目もあった。

④学修行動・生活調査

- ・回答率100%で、満足度5段階（とても満足、満足、どちらともいえない、不満、とても不満）のうち、満足している（「とても満足」+「満足」）が100%であった。

⑤コロナ禍で工夫したこと

- ・パワーポイントなどわかりやすい教材づくりと、わかりやすい授業を心がけた。
- ・実習施設を集約させ、事前打合せもリモートで実施した。

（2）課題

- ①学生個々の特性に応じた授業の展開と個別指導
- ②個々の学生の体調を見ながら、柔軟な対応での授業実施

（3）特記事項

- ・授業を受けたいがコロナ禍で登校できない学生には、オンラインで聴講できるよう学びの環境を保証したが、急なハイブリッド対応など、授業担当者に負担をかけた。

(4) 改善計画

- ① 日常の場面で気づいたことは情報共有し教育の質を高める。
- ② 対面からオンラインあるいはハイブリッドと急な変更があった場合、教員側が準備してきた教授方法に固執することなく、その時々に行える範囲で対応するよう努める。
- ③ 情報化・デジタル化、「進化・深化する介護」等に対応していくため、令和5年度入学生の履修科目の見直しと、2年生の生活支援技術に介護ロボットの授業を1単位分位置付ける。

8 卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

(1) 現状

- ① 卒業認定ならびに学位授与の方針は、学則第2条の2にある学科の目的達成のために編成した教育課程を履修し、規定の単位を修得することとなっている。
- ② 学科の卒業認定・学位授与方針は学科の学修成果に対応しており、卒業の要件、成績評価の基準、資格取得の要件も「学生のしおり」で明確に示している。
- ③ 学科の卒業認定・学位授与の方針は、短期大学設置基準と照らし合わせて点検しており、社会的・国際的に通用性があると考えます。
- ④ 卒業生の単位取得状況や科目の履修状況などを参考にしながら、能力基準別到達目標（学修成果）の点検を年度末に行っている。
- ⑤ 合理的な配慮が求められる学生であっても介護福祉学を学ぼうという志のある学生については、適切な支援を行うよう努めている。

(2) 課題

特になし

(3) 特記事項

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、レポートでの成績評価が多かった。

(4) 改善計画

- ① 引き続き学生がゆとりをもちながら国が定める介護福祉士養成課程の科目と単位を確実に修得できるよう、学則及び介護福祉士養成課程履修細則の点検、実習時期・内容の点検、単位取得の工夫を行う。
- ② レポートによる期末試験での採点基準を教員間で平準化するための検討。

9 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

(1) 現状

- ① 教育課程編成・実施の方針は、卒業認定・学位授与の方針に対応させ、同時に見直し

を行っている。

- ②短期大学設置基準に則り、学修成果に対応した授業科目の配置となるよう毎年点検を行っている。
- ③学科の教育課程は「学生生活のしおり」に記載し、資格取得との関連も含めて学生にわかりやすく明示している。
- ④教育課程編成方針、教育課程実施方針（教育内容・方法）と学修成果の評価方法、学修成果の評価は年度末に見直しを行っている。
- ⑤介護福祉士養成課程においては必修科目に含めるべき教育内容が国により定められており、該当科目はシラバスでその点が確認できるようにしてある。
- ⑥介護職員初任者研修においても、定められた教育内容を漏らさず実施できるよう取り組んでいる。
- ⑦教育課程懇談会は、卒業を間近に控えた2年生に感想や意見を述べてもらう場と、学内の兼任教員や学外の非常勤講師から話を伺う場の2つを設けてある。

（2）課題

特になし

（3）特記事項

教育課程懇談会を今年度は学生とは対面で、教員とはオンラインで実施し、学生、教員から忌憚のない意見を伺うことができた。

（4）改善計画

- ①情報リテラシーに対応した科目に取り組む。
- ②介護予防運動トレーナー、ウォーキングトレーナー、公認初級パラスポーツ指導員の資格認定カリキュラムに取り組む。

10 幅広く深い教養

（1）現状

- ①Web シラバスにおいて教育課程体系図（カリキュラムツリー）を示している。
- ②学科の教養科目には区分「健康」「人間と社会」「外国語」がある。区分「健康」では、「健康福祉論」「アクティビティ概論」「アクティビティ演習」を新たに設けた。区分「人間と社会」では、ICT時代に生きる学生のために「生活と情報」でのパソコン技術習得の科目、本学科のみの「ボランティア演習」、実際の生活でも活用される「コミュニケーション論」はじめ、福祉の基盤でもある「人間の尊厳と自立」など、幅広く深い教養と豊かな人間性を修得できるよう科目を配置している。
- ③「教養演習」では、自発的・主体的に学習し、「読む」「読み取る」「考える」「書く」「意見を出す」「調べる」という能力を高めることを目的としている。ゼミクラス方

式による少人数の参加型学習（各グループ5名程度）で進め、各グループには学科の専任教員1名がつく。福祉分野を取り上げた新聞記事を自分で選び、選んだ理由や感想を述べるなどして、まとめる力や発表力を高めることを導入に行う。各グループでテーマを設定し、調査した内容を整理してスライドを作成して、グループごとに発表を行った。昨年度に引き続き、本学がある呉羽地域でのフィールドワークをグループ単位で取り組み、1年後期に開講する「総合的研究」へと円滑に繋がっている。

- ④区分「外国語」では、異文化及び言語に触れ、国際交流に役立つコミュニケーション能力を養うため、「英語」と全学共通の短期留学プログラムを設けている。「英語」は本年度から、選択科目から必須科目にした。福祉分野での英語表現を教材にしている点が特色である。

（2）課題

健康系の資格「ウォーキングトレーナー」「介護予防運動トレーナー」「公認初級パラスポーツ指導員」の導入にあたり科目の見直し・再編成が課題である。

（3）特記事項

健康福祉を学ぶ学科としての特性を明確に伝え、科目編成に取り組んでいる。

（4）改善計画

健康系の資格「ウォーキングトレーナー」「介護予防運動トレーナー」「公認初級パラスポーツ指導員」の学びに対応するため、教養科目における、「健康関連科目」の位置づけと単位数及び内容を検討する。

11 職業教育の実施

（1）現状

- ①キャリア教育については、今年度より「キャリアデザイン演習」科目を1年次前期に開講することとした。特別講座や実践講座を組み入れながら実施している。また、就職支援センターにより、1年次の3月に就職ガイダンスが開かれている。
- ②ゼミ担任を主にしながら、学科教員で進路に関して個人面談を適宜実施し、就職や進学にむけての履歴書指導や面接指導をおこなっている。
- ③採用先へのお礼訪問では、お礼とともに本人とも面談するほか、採用先から本学への要望についても聞き取り、報告書としてまとめ、学生指導に反映している。
- ④インターンシップでは、医療・介護・福祉業界からの説明を受けて業界理解・仕事理解を深め、実際にその業務の一部を体験・見学することにより、福祉ビジネス人として必要な知識・技能・態度を身に付け、早期の就職活動に繋げるように努めている。
- ⑤介護実習では、各自が施設実習を通じて介護観を構築できるよう働きかけている。今年度からは、基礎実習の期間を2段階に分け実施した。基礎実習では実習指導者の協

力のもと、シャドーイングを取り入れた実習を行った。

(2) 課題

- ①複数人が同じ事業所等を希望する場合は、ゼミ担に限らず、一人の教員が同じ視点で指導をおこなっていく体制が必要である。
- ②能動的な就職活動を行うよう学生の意識を高める働きかけを推進する。
- ③学生は実習先から就職先を選択する傾向があるが、社会福祉協議会や公的病院などのニーズにも対応できるよう、視野を広げた就職活動を推進する。

(3) 特記事項

例年、学生は進路決定をするために施設見学をしているが、本年度は新型コロナウイルス感染対策を行い、感染状況に応じて施設見学を行うよう指示した。

(4) 改善計画

- ①「キャリアデザイン演習」科目で実施していた外部講師による面接指導や特別講義などの実施時期について再度検討していく。
- ②介護実習やインターンシップの受入先を開拓し、今以上に多様な進路選択を可能にしていく。

12 アドミッション・ポリシー

(1) 現状

- ①【求める人物像】では、3つの人物像を明示することで、学科の学びの特性と求める人物像が高校生に同時にわかるようになっている。
- ②【高等学校で修得しておいてほしい内容】では、修得してきてもらいたい内容をできるだけ具体的に提示している。
- ③【求める資質・能力】では、全学的な方針に合わせたものを基本にしている。
- ④【入学者選抜における評価方法】では、「富山短期大学入学者選抜実施要綱」に基づき、各入試の選考方法に応じて多面的・総合的に評価することを明記し、広く学生募集を行う旨を伝えている。
- ⑤総合型選抜では、本学科のみA日程という学校推薦入試より先に合格を決めることができる入試を設け、早く進路決定させたい受験生のニーズに応えている。
- ⑥一般選抜（前期）では、2科目の筆記試験のうち上位の得点を採用する方式を取って、受験生の確保を目指すとともに学力判定につなげている。

(2) 課題

より学科の特性がわかる文言を盛り込んでいく。

(3) 特記事項

- ①アドミッションポリシーの範囲の中で、令和6年度入試に向けてさらなる入試制度の導入に関する検討をおこなった。
- ②「駅なかオープンキャンパス」を2回にわたって富山駅の南北自由通路にて開催。学科のイメージを広く社会に伝えられるよう、新たな取り組みを展開した。
- ③学科独自で特別高校訪問に取組み、20校余りの高校へアドミッションポリシーの意図するところや学科の進路実績などの広報活動に努めた。
- ④金沢駅もてなしドーム地下広場での「進学と体験の1 day フェア」に参加。積極的に県外でも学科の特性や魅力の発信を行った。
- ⑤入学者受け入れに関する情報発信として「駅なかデジタルポスター」の掲示を、「電鉄富山駅コンコース」と「高岡駅南北自由通路」の2か所で行った。

(4) 改善計画

社会の変化と時代の要請に合わせて、絶えず見直しに努める。

13 学習成果の明確化

(1) 現状

- ①2年次の11月に、日本介護福祉士養成施設協会による全国統一の学力評価試験を受け、各々の学生はその時点での学修成果の明確化を行っている。
- ②Web シラバスで各科目の学修成果別評価基準(ルーブリック)と照らし合わせながら、履修学生による授業評価アンケートをもとに、学生の学習成果の把握に努めている。
- ③卒業認定に合わせ、各資格の取得人数(修了者数)の集計を出し、その学年における学習成果として明示している。

(2) 課題

特になし

(3) 特記事項

特になし

(4) 改善計画

「学修成果別評価基準(ルーブリック)」の見直しを図り、改善につなげる。

14 学習成果の獲得状況の量的・質的データによる測定の仕組み

(1) 現状

- ①質的データ

- ・介護実習において、実習報告レポートをもとに実習報告会を開催して、教員による成果の把握と学生間での学びの共有を図っている。また、実習記録の指導者からのコメントも学習成果の把握に活用している。
- ・介護実習において、各自で「経験録」を実習ごとに記入し、何を見学したか、説明を受けたか、体験したかなどの区分で記録を残せるようにしてある。これにより、実習ごとでの詳細な経験内容をふり返られるようになっている。

②量的データ

- ・卒業前には学修行動・生活調査を行っているほか、1・2年生に前期後期において授業評価アンケートを実施し、学修成果の獲得状況への学生の感想を把握している。
- ・介護福祉士資格を目指す学生は全員、生活支援技術の到達度の判定を卒業前に受けている。
- ・毎年11月下旬には日本介護福祉士養成施設協会による全国統一での学力評価テストを受け、学力面での到達度の把握をしている。
- ・業者による介護福祉士国家試験に向けた模擬テストを、2年次に実施している。
- ・介護福祉士国家試験については全国の養成校の合格率、メディカルクラーク、ケアクラークをはじめその他の資格試験については全国の合格率、本学科の前年度の合格率等と比較している。
- ・就職指導については就職率及び就職先の種類を比較している。

(2) 課題

- ・学修成果を確認するツールとなる授業評価アンケートの回答率100%を目指す。
- ・資格取得には検定料・登録料が必要なため、資格取得を躊躇する学生がいる。

(3) 特記事項

実習指導者と共に「介護実習の評価に関する検討会」を開催(Zoom、4回)し、実習の評価の仕方について継続的な議論と意見交換を行い、実習評価票を改良した。

(4) 改善計画

資格検定の受験者を増やすとともに、合格率を引き上げるよう努める。

15 学習成果を可視化する指標

(1) 現状 ※令和4年度 2年生実績

- ①介護福祉士国家試験：合格率100% ※全科目を受験した現役学生
- ②医療事務技能審査試験：合格率85.7%
- ③ケアクラーク技能認定試験：合格率100%
- ④福祉住環境コーディネーター検定試験：2級の合格率100%、3級 41.7%
- ⑤社会福祉主事任用資格修了者 25人

- ⑥介護職員初任者研修修了者 25人
- ⑦普通救命Ⅱ講習修了者 19人
- ⑧医療的ケア基本研修修了者 18人
- ⑩介護サービス担当者のためのストーマケア講習会修了者 19人
- ⑪編入学希望者：四大への合格率 100%
- ⑫介護福祉専門職を目指す学生の就職状況：専門職就職率 100%

(2) 課題

実習の時期、資格取得に要する費用が受験者、合格率に影響を与える。

(3) 特記事項

介護福祉士はじめ、医療事務・介護事務の合格率は全国平均より高い。

(4) 改善計画

- ①実習との関連も考え、さらに合格率アップにつながる受験対策講座開催時期等、手立てを講じていく。
- ②健康運動関連の資格として令和5年度入学者より介護予防運動トレーナー、ウォーキングトレーナー、公認初級パラスポーツ指導員の資格取得の認定校および授業を計画している。

16 卒業後評価への取組み

(1) 現状

- ①5月の連休後から7月にかけて県内の卒業生の就職先を訪問し、本人や上司等との面談結果を学科で共有し、学生指導に反映させている。このほか、実習巡回で施設を訪問した際にも、過年度の卒業生の様子を伺うようにしている。聴取結果によっては進路先と連携を図りながら、卒業生への対応を行う。
- ②「がんばる介護職員表彰（通称：がんばりすと）」（県知事により介護事業所の優秀な中堅職員を表彰する制度）において、令和4年度は受賞者20人中6人が学科卒業生であった。学科卒業生の受賞状況は、これまでに33人を数える。
- ③令和3年度の卒業生を対象に、Zoomを用いてのオンライン同窓会を毎月1回開催し、アフターケアと現状把握に努めた。

(2) 課題

コロナ禍もあって就職先に余裕がないことから、卒業生の新規採用職員が相談や質問をしづらい職場もあり、支援が必要である。

(3) 特記事項

就職お礼訪問では4年度も引き続き、訪問可能な事業所においては必ず卒業生と面談して職場定着の様子を確認してきた。

(4) 改善計画

就職先や進学先への定着をすべての卒業生が果たせるよう、引き続きオンライン同窓会を開催していく。

17 教育資源の有効活用

(1) 現状

福祉棟 D 館 3 階ラウンジに 3 台のデスクトップ PC の設置と、学内貸出用の 7 台のノート PC (カメラなし) ならびに 3 台のカメラ付きノート PC を学科で準備。D 館 1～3 階および C 館 2～3 階まで 1Gbps のイーサネット LAN を設置し、一部の実習室を除き Wi-Fi 環境も整備されている。

本年度はさらにタブレット 10 台とインカム 10 台を整備した。

(2) 課題

令和 5 年度入学生からノート PC を必携とした。福祉ビジネス・情報系の科目だけではなく、その他の科目においてもノート PC を活用した授業を展開し、デジタル化を進めることが課題である。

(3) 特記事項

「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」の導入に向かって、デジタル化へ対応する教育課程の編成に取り組んだ。

(4) 改善計画

学習用 PC の利用を促進し、日常の学習や遠隔授業のみならず、実習やインターンシップの記録にも活用し、進化・深化していく介護に対応する人材育成に取り組んでいく。

インカム、タブレット、介護ロボットの活用をはじめとする ICT や AI を視野に入れた学習を進める。

18 学習支援

(1) 現状

①入学前セミナー

12 月までの推薦入試における合格者を対象に実施し、事前課題を設け提出してもらった。当日は、課題の振り返りとレポートの書き方についてのミニ講義も行った。

②新入生ガイダンス

短大での学習と学生生活等に関して、入学後にオリエンテーションを実施している。

③ プレースメントテストの実施

1年生全員に基礎的な国語力を見る問題でのプレースメントテストを実施し、その後の学習支援に役立てている。

④ 資格取得対策

介護福祉士国家試験の受験対策をはじめ、福祉住環境コーディネーターの資格試験に向けて担当教員が補習授業をするほか、特別授業も開講している。

⑤ Web シラバスの活用

Web シラバスシステムを利用することで、学習成果の獲得状況の量的・質的データに基づき学習支援方策を点検している。

⑥ 個別支援

学習上の課題を持つ学生に対しては、クラス担任、ゼミ担任、分野別教員により多面的な支援を行うほか、状況に応じて学科の会議で共有するなどの体制をとっている。また、保護者とも連携しながら進めている。

⑦ 経済的な支援

経済的な課題を抱える学生には、富山県社会福祉協議会による介護福祉士等修学資金（介護福祉士国家試験受験資格取得希望者が対象）や日本学生支援機構奨学金（第一種、第二種）等を紹介している。また、受験生に対してもオープンキャンパスや入学前セミナーで案内している。保護者には入学後のオリエンテーションで説明している。

（2）課題

介護福祉士養成のための指定科目の学習に加え、10週間の学外実習や国家試験対策もあり、のびやかな学生生活を過ごしてもらうための教育課程の工夫が求められる。

（3）特記事項

演習でのグループワークでは感染症予防策として、密にならないよう配慮した他、教室の換気にも努め、実技ではフェイスシールドを着用した。

（4）改善計画

- ① 学習に課題を抱える学生の進路選択をどう導くか、学生の心情や事情にも配慮しながら進めていく。
- ② 学生の個別性を踏まえた少人数教育で、学習成果を高めていく。

19 生活支援

（1）現状

- ① 学生の生活支援においてゼミ担当教員が主となり、学科会議等で教員間での情報共有をおこなっている。

- ②「健康チェックシート」や、学生と一緒に「介護実習コロナ感染予防対策マニュアル」の 2022 版を一部修正し配布するなど、感染症対策を意識した生活を送れるよう支援している。
- ③メンタルヘルスにおいては学生個々に合った対応を心がけ、学生の同意があれば学科教員間で情報を共有しながら支援をしている。コロナ感染等、心身に不調を生じている学生は医師の指示のもとオンライン聴講できるようにしている。
- ④学生生活に関し学生から意見や要望があった際はその都度、学科の会議で検討し対応をおこなった。卒業前には 2 年生全員が参加する「教育課程懇談会」を開催し、学生生活についての意見や要望を聴取した。

(2) 課題

令和 4 年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により感染者や濃厚接触者がでたことから、突然、ハイブリット形式の授業となることもあり、登校時には学生の心身の変化を見逃さないことが必要である。

(3) 特記事項

特になし

(4) 改善計画

- ①特別な配慮を要する学生には日頃から個別に連絡を入れるなど、いつでも相談ができる環境を提供する。
- ②成人年齢の引き下げに伴う責任や SNS のリスクなど、安心安全な学生生活に向けた注意喚起を行う。

20 進路支援

(1) 現状

- ①今年度から 1 年前期に「キャリアデザイン演習」を開講した。一般企業の採用活動が前倒しになっている傾向を受け、福祉ビジネス系の学生が就活で後れを取らないよう取組みを進めた。
- ②福祉職場説明会（「福祉のお仕事フェア」）には学科教員が引率し、事業所との橋渡し等を行った。一人最低 3 か所を目途にブースを回り、比較検討しながら志望先を選べるよう指導した。事前指導では求人票の見方や説明会の活用の仕方を説明した。
- ③2 年生の動きを就職支援委員が中心となり把握し、科会での情報共有に努めるとともに、就職支援センターとの連携も進めた。
- ④難関の受験先の場合、学科長と就職支援委員とで面接練習を複数回行い、送り出した。
- ⑤履歴書添削は、本人の主体性を引き出しながらゼミ担任による個別指導を行った。
- ⑥就職支援センターによる企業訪問の事前指導や面接指導を受けることを勧め、学生の

モチベーションアップと自信の向上につなげた。

- ⑦作文試験がある事業所の場合、就職支援委員が添削指導を行った。
- ⑧全員が介護職員初任者研修を修了できるカリキュラムにすることで、福祉ビジネス分野に進む学生においても介護の知識を就職活動でアピールできるようにしている。
- ⑨医療事務は積極的に情報収集に努め、時期を逃さず採用試験につないだ。
- ⑩編入学試験では、編入学試験の直前にある施設実習の合間を使い、面接や小論文の指導を繰り返し行った。
- ⑪四年制大学への編入学支援では、通常であれば編入学後に履修する科目の一部を短大在学中に履修できる「科目等履修生」制度を活用している。
- ⑫委託訓練生にはキャリアコンサルタントによる個別面談を取入れ、採用内定まで学生の不安を軽減させながら主体的に取り組んでもらうための支援をしている。
- ⑬進路指導特別講座「先輩と語る会」を後期のガイダンスに合わせて開催し、1・2年生全員が参加した。

(2) 課題

適性検査がある受験先に備えた対策が急務である。

(3) 特記事項

- ①介護分野ならびに福祉ビジネス分野ともに、就職率 100%を達成できた。また、編入学希望者 2名の合格も達成した。
- ②四大に編入学した卒業生の進路指導にも取り組み、面接対策や求人情報の提供などを行った。また、卒業生への編入学指導として、志望理由書の添削と面接練習を複数回行い、合格につなげた。
- ③転科生を初めて受入れ、科目の読替や授業の組立てなど、多岐にわたり支援を行った。

(4) 改善計画

適性検査の対策を考える。

21 健康支援

(1) 現状

- ①修学上の健康課題を抱える学生には、学生部や教務部とも連携し、組織的な支援を行っている。
- ②相談内容によっては一律的にクラス担任が相談窓口となるのではなく、より適切な教員が対応するよう配慮している。
- ③入学間もなく気になる学生については、出身高校を訪問し、切れ目ない支援を行った。
- ④必要に応じ、主治医、保護者とも面談をし、情報の共有や訴えの確認、そして、継続的な連絡も状況に合わせて行っている。

- ⑤体調不良により配慮を要する学生に対し、医師の指示のもと単位取得ができるよう授業及び実習の調整を行った。

(2) 課題

- ①学科内での当該学生への支援体制の構築
②学内の関係部署との情報共有のあり方や対応面での意思統一の持ち方

(3) 特記事項

配慮が必要な学生については、実習指導者と連携し実習目標を達成できた。

(4) 改善計画

- ①課題を抱える学生へ、必要とする支援の確認と対応
②休学や退学を防ぐための、保護者との早期からの連携

※22～25の点検項目は他部署で記載のため省略

26 教育研究活動

(1) 現状

- ①専任教員は、各規程を遵守しながら、教育課程編成・実施の方針に基づき、教育活動をおこなうとともに、関連する諸学会に所属して研究活動を実施している。
- ②限られた時間の中で、学内紀要への投稿や学会発表に努めた。
- ・令和4年度は「富山短期大学紀要」に、論文1編（共同研究者）、研究ノート2編が掲載された。
 - ・日本レセプト学会学術大会で「三層構造モデルによる異文化適応から見る介護技能実習生のキャリア展望—ベトナム人介護技能実習生19名からの聞き取り調査から—」が特別賞を受けた。
 - ・2022年度厚生労働省老人保健健康増進等事業「介護現場での社会実装化を見据えた外国人介護人材キャリア育成に資する有効な手法確立のための調査研究事業」の成果報告を行った。
 - ・第25回日本地域看護学会学術集会で、「地域を基盤とした住民の介護の仕事理解促進のための包括的プログラムの取組」「介護事業所での体験実習を付加した地域密着型の『介護に関する入門的研修』の取り組み」の実践報告をオンデマンドで行った。
- ③近年、介護福祉士養成課程の時間数が増加し、研究活動の時間の確保が困難になってきていることから、教員は授業や学生指導など教育活動に関連した領域で研究活動を行うように努めている。
- ④FD研修では積極的に参加し、他の学科の教員との交流を通し、学びを深めている。
- ⑤専任教員は学生の学修成果の獲得に向け教務入試課、学生支援課、就職支援センター、

そして他学科と連携をしている。

- ⑥「とやま安心介護ネットワーク」の会議に教員も参加し、県内外のコロナ感染状況やワクチン等の情報を把握し、学生指導や実習などの調整に活用している。
- ⑦3年計画で富山県からの委託事業「地域での介護の仕事魅力アップ推進研究モデル事業」の2年目の取組みとして、新たに「つなぐ・つながるプロジェクト」や「介護助手交流会」を開催し冊子を作成した。
- ⑧1年前期の「教養演習」および1年後期からの「総合的研究」においてフィールドワークの手法を導入し、調査研究の対象を大学が立地する呉羽地域に設定して取り組んだ。
- ⑨学科内の環境整備に取り組み、新たに1階実習室で見せる収納へ模様替えを行った。
- ⑩総合的研究の発表会では広く呉羽地域の各種団体や組織、福祉施設等、フィールドワークでお世話になった方々からの参加があった。併せて、たくさんの質問や助言をいただくことができ、過去にないほどの示唆と活気に満ちた発表会になった。
- ⑪富山国際大学 子ども育成学部への3年次編入学を志望する学生で、一定の条件を達成している者には科目等履修生の制度を活用し、学部で開講する科目の履修を促している。

(2) 課題

教育・研究の時間の確保

(3) 特記事項

- ①令和4年度に富山県で開催された日本地域看護学会学術集会の企画委員として教員1人が参画し、教育講演座長、シンポジウム座長を務めた。また、非常勤講師1人が実行委員を務めた。
- ②富山県老人福祉施設協議会の研究レポート選考委員
専任教員が、県老協による研究レポートの選考委員会で座長を務めている。
- ③本学学長が大会長の日本介護福祉士養成施設協会の令和4年度全国教員研修会で教員1人が実行委員を務めた。

(4) 改善計画

- ①学生の視点から教育活動全体を見直すとともに、研究活動の時間を確保し、また、科内会議で専任教員同士が研究について情報交換する機会を設けていく。
- ②「地域での介護の仕事魅力アップ推進研究モデル事業」は、令和5年度は「地域住民に対する介護の理解促進事業」と「介護に関するに入門的研修の実施等からマッチングまでの一体的支援研究事業」の評価を行う予定である。